

## ジェイムズ・ボールドウィンの後期小説再考-その語りを中心に-

著者	清水 菜穂
号	1
学位授与番号	8
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/36850">http://hdl.handle.net/10097/36850</a>

し みず な ほ  
清 水 菜 穂

学 位 の 種 類    博 士 (国際文化)

学 位 記 番 号    国博 第 8 号

学位授与年月日    平成12年 3 月23日

学位授与の要件    学位規則第 4 条第 1 項該当

研究科・専攻    東北大学大学院国際文化研究科 (博士課程後期 3 年の課程)  
国際地域文化論専攻

学位論文題目    ジェイムズ・ボールドウィンの後期小説再考  
ーその語りを中心にー

論文審査委員    (主査)

教 授 竹 中 興 慈

教 授 壹 岐 泰 彦

助教授 小 原 豊 志

教 授 佐々木      肇

(岩手県立大学盛岡短期大学部)

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 序章 問題の所在及び本論文の目的・概要

James Baldwin (1924-87) は、長編小説 *Go Tell It on the Mountain* (1953) を始めとする小説や多数のエッセイによって知られる、アメリカ黒人文学の代表的作家である。ボールドウィンは、エッセイの中で、アメリカの人種問題を黒人と白人が互いに深くかかわってきたアメリカ社会の問題ととらえ、両者は互いの貴重な経験によって分かちがたく結びつけられ、そこにアメリカ人としてのアイデンティティを見出すべきだと主張した。彼はまた、1960年代には公民権運動に直接かかわり、黒人問題のスポークスマンと見なされた時期もあった。

ボールドウィンは長編小説を六編残したが、最初の三作 *Go Tell It on the Mountain*、*Giovanni's Room* (1956)、*Another Country* (1962) と、後の三作 *Tell Me How Long the Train's Been Gone* (1968)、*If Beale Street Could Talk* (1974)、*Just Above My Head* (1979) を比較すると、両者に対するこれまでの文学的評価は全く異なっている。前期三作品は、

登場人物の苦悩を、アメリカ社会に対する深い洞察に基づいた知性とあふれるばかりの雄弁さで表現していると見なされる一方、後期作品は、作者の力量の衰退を示していると酷評されている。

後期小説に対する従来の低い評価は、直接何が語られているかという点にだけ焦点をあてる読解方法にもその一因がある。後期小説にはどれも作者本人と極めてよく似た人物が登場し、彼らの苦悩は切迫感に満ちた一人称の語り手によって語られる。そのため、語り手や作中人物に生身の作者の姿を重ね合わせ、彼らの言葉を公民権運動のスポークスマンと見なされた作者の政治的メッセージとして読む傾向が生じ、その結果、後期作品には前期作品の描くものが説得力を持って表現されていないと判断されてしまう。しかしながら、物語が何を語っているかではなく、いかに語っているかという語り方を通して作品を読み解くことによって、ボールドウィンの後期小説が描くアメリカ社会の新たな意義を見出すことができると考えられる。

本論文では、これまでのところ評価の低いボールドウィンの後期の長編小説三作品を取り上げ、語り手や作中人物の言葉を作者個人の思想や主張を直接表現するものとして読むのではなく、各作品の一人称の語り手の語り方に注目し、その語りを通して見出せる表現者としての作家像を明らかにすることを目的にする。

第一章から第三章までは、それぞれ一作ずつを取り上げ、その語りの特徴を通して読解を試みる。第四章では、後期小説の提示する「言葉で語ること」に対する認識を、作者ボールドウィンの公民権運動での体験から生まれた作家意識及び歴史意識を通して考察する。結びでは、本論文で明らかにしたボールドウィンの後期小説における作家像の意義について論じる。

## 第一章 語りの二重性 — *Tell Me How Long the Train's Been Gone*

第一章では、Leo という黒人俳優が心臓発作の体験を契機に自らの半生を語る *Tell Me How Long the Train's Been Gone* を取り上げる。

第一節では、この作品に対する従来の批判の論点とその問題点を明らかにし、第一章における分析視点を述べる。

この作品は、従来、卑語の多用、長いパラグラフ、断片的なエピソードの羅列という語りの特徴が文学的欠点であると思われてきたが、このような見方は、一人称の語り手が直接何を語っているかという点にだけ注目しているといえる。直接語られていることだけが重視されるからこそ、そこには明確な言葉では何ら表現されていないとされ、その結果失敗作と見なされる。しかしながら、なぜこのような語り方がなされるのか、その理由を読み解くことによって、この作品が表現するものの新たな姿を示すことができると考えられる。また、この作品においては、心臓発作は語り手自身の「恐れ」を象徴しており、語り手の語りの動機とは、心臓発作という命にかかわる経験を契機に、発作の象徴する、語り手の人生における大きな「恐れ」を語ろうとしたことにある。しかしな

がら、語り手はその「恐れ」が何に対する「恐れ」であり、どのように「恐れ」ているのかについて、具体的に語ることはしない。

第一章では、この作品の文学的価値をおとしめると見なされてきた、卑語の多用、長いパラグラフ、断片的なエピソードという三つの語りの特徴を通して、テキストが提示する語り手の人生における「恐れ」とは何か、その具体的な姿と意味を明らかにし、また、このような語り方でなければそれを表現できない理由を考察する。

第二節では、語りの三つの特徴のそれぞれがどのように現れているかを具体的に考察し、語り手の「恐れ」を表現するのになぜこのような語り方がされるのか、その理由を明らかにする。

卑語は直接的には怒りを表現するものであるが、その卑語の背後には、黒人特有の「恐れ」が浮かび上がるのを見出すことができる。皮膚の色が黒いというだけで逮捕され、刑務所に送られてしまう黒人特有の現実、命を失うかもしれないという「恐れ」や、命と引き換えに人間としての自尊心を放棄しなくてはならないのではないかという「恐れ」を語り手に抱かせる。このような「恐れ」はあまりにも大きく複雑なものであるため、語り手は自らの「恐れ」を直接言葉で表現することができない。語り手の「恐れ」はむしろ、常に「恐れ」とともにある怒りを表す卑語の背後に浮かび上がる。すなわち、卑語の多用という語りの特徴は、言葉で直接語ることはできない黒人特有の「恐れ」を間接的に表現しているのである。

語りの第二の特徴である2ページ以上も続く長いパラグラフが表現するのは、人間として自尊心に基づいて行動しようとしても、黒人であるという現実によってそれが妨げられる語り手の絶望感や虚無感である。しかしながら、その長い語りが表現する絶望感や虚無感の背後には、やはり言葉で直接語ることはできない語り手の「恐れ」を見出すことができる。

エピソードとエピソードの間に何らつながりがないように見える、断片的なエピソードの羅列という手法は、同じ句の反復や物の名前の羅列など、共通の表現方法やイメージなどによって、自ずと他のエピソードを読者の脳裏に呼び起こす。その結果、言葉で直接語ることはできない語り手の「恐れ」は、重層的なイメージとして、その語りの背後に浮かび上がってくる。

このように、卑語の多用、長いパラグラフ、断片的なエピソードの羅列という三つの語りの特徴は、語り手が言葉で直接語ることはできない、黒人特有の現実が生み出す「恐れ」を間接的に表現し、作品全体の語りに二重性という特徴を与えている。

第三節では、黒人解放思想家 W. E. B. Du Bois によって黒人特有の二重性であると指摘された「アメリカ人であることと黒人であること」を通して、前期作品と比較しながら、語り手が俳優として成功してもなお「恐れ」を語ることができないのはなぜか、について考察する。

語り手の「恐れ」とは、自己実現を願うアメリカ人としての理想と、黒人的価値観を重んじる黒人としての理想の二重性から生じるものである。このような二つの理想は、前期の *Go Tell It on*

*the Mountain* においては対立するものとして描かれ、主人公によってそのどちらか一方が選択されるものとして表現されている。一方、*Tell Me How Long the Train's Been Gone* では、二つの理想はともに語り手という一人の人間の内面を形成し、すでに彼自身の一部となっている。したがって語り手は、二つの理想のどちらか一方を選択することも、両者を融合することもできない。語り手が自己実現を果たした今でもこの二重性から生じる「恐れ」を克服できないのは、黒人が自己実現を果たすとは、「アメリカ人であることと黒人であること」という自らの二重性を統合するどころか、かえってその二重性を再確認しながら生きてゆかざるを得ないことを意味するからである。このように、白人中心のアメリカ社会において黒人が成功することとは、黒人特有の二重性を克服することの不可能性を再確認する結果を彼らにもたらしているのである。

第一章で明らかになったのは、この作品の三つの語りの特徴は、言葉で語ることができないほど過酷な黒人特有の「恐れ」を、間接的に表現するための装置であるということ、そしてこのような特徴的な語りが意味するのは、黒人がたとえ自己実現を果たし、社会的成功を手にしたとしても、「アメリカ人であることと黒人であること」の二重性はけっして克服されることなどなく、その二重性から生じる「恐れ」は、今なお言葉で直接語ることができないほど過酷で複雑だということである。

## 第二章 黒人女性の語り — *If Beale Street Could Talk*

第二章では、若い黒人女性 Tish が、無実の罪で逮捕された恋人の Fonny を、家族とともに救い出そうとする物語 *If Beale Street Could Talk* を取り上げる。

第一節では、従来の作品解釈とその問題点を明らかにし、第二章における分析視点を述べる。

従来、この作品は、語り手ティッシュの愛や家族のきずな、あるいは理解しあう父親と息子の姿が中心的テーマであると解釈されてきた。しかしながらこの作品は、ボールドウィンの小説の中で唯一女性主人公の一人称の語りによる物語であり、しかもこの語り手は、読者を圧倒するような雄弁さも自らの感情を詳細に語る多弁さも持たず、素朴で朴訥とした語り口で語る。ボールドウィンの小説において、なぜこの作品だけがこのような素朴で幼い語り方がされるのか、このような語り方でなければ表現されないものとは何か、についてはこれまで考察されることはなかった。ここで注目するのは、語り手の「凝視」という行為である。作品冒頭で語り手が鏡に映る自らを「凝視」する姿は、語り手が正式な洗礼名で呼ばれずにいることと、恋人が無実の罪で逮捕されたことには、共通する社会の道理があることを示唆している。しかしながら、語り手はその二つに共通する道理を明確に言葉で表現することはない。「凝視」は、言葉で巧みに語ることをできない語り手が、物事を理解し、それを相手に伝達する手段として、この作品においては重要な役割を果たしている。

第二章では、「凝視」という行為に注目して、この作品で描かれるアメリカ社会の姿を明らかに

し、それを通して、この作品における黒人女性主人公の語りの必然性を考察する。

第二節では、語り手が洗礼名で呼ばれぬ理由と恋人のフォニーが無実の強姦罪で逮捕される理由を、語り手の「凝視」という行為を通して読みとり、そこから浮かび上がるアメリカ社会の弱者に対して、テキストがどのような認識を提示しているかを明らかにする。

語り手が正式名である洗礼名で呼ばれることがないのは、キリスト教的価値観においては、結婚前に妊娠した語り手は罪人と見なされるからであり、フォニーが無実の強姦罪で逮捕されるのは、肌の色によって差別するアメリカ社会の人種意識のためである。両者に共通するのは、アメリカ社会においては、キリスト教的価値観と皮膚の色に基づく人種意識が、個人を社会の正当な一員として認知する価値基準だということである。その一方で、語り手は信仰心が厚いとされる人々を「凝視」することで、キリスト教会の虚偽的な姿を明らかにし、白人警官の性的欲望を「凝視」することによって、警察が代表する白人中心のアメリカ社会の虚偽性をあらわにする。幼い語り手は、個人に認知を与える社会的権威の虚偽性を言葉で直接表現することはできないが、それらを「凝視」する自らの姿について語るたどたどしい語り口は、かえってその虚偽性の生々しさを浮かび上がらせる。語り手の「凝視」はさらに、強姦の被害者であるプエルトリコ人女性や多くのプエルトリコ人もまた、黒人と同じようにアメリカ社会における弱者であることを示す。雄弁な表現力を持たない未熟な語りだからこそ、言葉にかわる手段である「凝視」によって浮き彫りにされる、社会から認知されない弱者の立場にある人々の姿に説得力が増すのである。

第三節では、この作品が提示する、アメリカ社会における黒人以外の社会的弱者への共感こそ、黒人女性主人公の一人称の語りでなければならない理由であることを明らかにする。

黒人女性史研究家 Patricia Hill Collins は、黒人女性は、メイドなどとして白人家庭を内側から観察することで、伝統的に社会の抑圧構造を正確に認識するようになり、また、生き抜くための知の伝達という点において、強いきずなを結んできたと指摘している。コリンズのこのような指摘から考えると、この作品が表現するアメリカ社会の虚偽的な姿や、そこで暮らす黒人以外の社会的弱者である人々に対する認識と共感は、黒人女性主人公の一人称の語りによってこそ表現されうると考えられる。社会的権威による認知の問題は、社会の抑圧構造を言葉で語ることはなくとも、伝統的に観察し「凝視」することでそれを理解してきた黒人女性が、自らの問題として認識することにより、その重要性が強調され、黒人以外の社会的弱者に対する共感は、弱者として常に連帯意識を培ってきた黒人女性の視点があつてこそ、初めて表現されうるのである。

以上述べてきたように、第二章では、アメリカ社会における権威の虚偽性とその中で暮らす黒人以外の弱者に対する共感は、黒人女性主人公による素朴で未熟な一人称の語りによるからこそ表現されうることを明らかにした。

### 第三章 語る行為と聴く行為 — *Just Above My Head*

第三章では、*Just Above My Head*を取り上げる。これは、2年前に亡くなった弟 Arthur について、兄の Hall が語る物語である。アーサーはゴスペル・ソングの有名な歌手であり、同性愛者でもある。

第一節では、これまでの作品解釈とその問題点を論じ、第三章における分析視点を述べる。

この作品では、語り手が自分自身の経験だけではなく、他の人々からの伝聞にすぎないことをただそのまま語り伝える部分が多く、このような手法は作品上の欠点と見なされたり、様々な角度から物事を見ようとする試みだと解釈されてきた。また、多くのゴスペル・ソングやブルースの歌詞がそのまま取り入れられていることは、作品に豊かな音楽性を与えていると評価されてきた。しかしながら、通常局外の全知の語り手によって提示される様々な角度からの見方を、この作品であえて一人称の語り手によって示す理由は何か、あるいは、歌詞以外の音楽的要素が具体的にどのような役割を果たしているのかについては、これまで論じられることはなかった。さらに語り方という点から見ると、この作品には、一人称の語り手が二次的語り手を導入し、自ら聴き手となること、一人称の語り手が局外の語り手へと変容すること、一人称の語り手の声が他の人物の声に転換すること、という三つの語りの変化が見られる。また、語り手の「語る行為」と「聴く行為」が様々な強調されていることも、この作品の大きな特徴である。

第三章では、上に述べた三つの語りの変化を通して、この作品における「語る行為」と「聴く行為」の意味を明らかにする。

第二節では、三つの語りの変化の現れ方について考察し、その意味するものを明らかにする。

二次的な語り手が多数導入され、中心的な語り手の聴き手役割が強調される語りの変化は、「語る行為」における「聴く行為」の果たす役割を明らかにしている。第一に、語り手の「聴く行為」は、二次的語り手の「語る行為」の契機であり、物語の成立に最も重要な「語る行為」を最後まですすめるための装置となっている。第二に、「聴く行為」は、直接言葉で語られることだけが真実を表現するのではなく、語り手が沈黙に耳を傾けるように、間接的な表現の中にこそ真実を見出すことができるのだという、「語る行為」の限界と新たな可能性を提示している。

一人称の語り手の局外の語り手への変容とは、一人称の語り手が気づいてはいるものの、理解することも表現することもできない隠された真実を、テキストが明らかにする際の表現形式である。一人称の語り手は、静けさや沈黙のような間接的な表現の中に、自らの罪深さに苦悩するアーサーの隠された真実があることに気がつくが、自ら物語の内部に位置しているため、アーサーについて客観的に語るができない。自らの位置を物語の局外に移し、普遍性を帯びた局外の語り手となって初めて、語り手はアーサーの隠された真実とは何かを想像し語るができる。様々な音楽的要素はその抽象性によって、語りに普遍性を与えている。

作品最後で、一人称の語り手ホールの声がアーサーの最後の恋人ジミーの声に転換するのは、「語る行為」の可能性を模索してきたこのテキストの最後の試みであると考えられる。ジミーの声には、これまでの語りを担ってきた様々な人々の声が凝縮されている。ジミーが語るアーサーの姿は、ホールを始めとする多くの語り手によって語られてきたアーサーの姿であり、一つの声による語りにあらゆる声を凝縮させるテキストの試みであるといえる。

この作品における三つの語りの変化はどれも、言葉で語ることでできない隠された生の真実を、どのようにして語り伝えることができるのかという、「語る行為」の模索を表している。自らの罪深さに苦悩し、歌うことで神に許しを請い、神に許されて初めて同性愛の喜びを全うできると考えるアーサーの隠された真実の姿とは、沈黙や静けさ、あるいは歌い方といった間接的な表現を、いわば「聴く行為」によって、理解され語り伝えられることが、ここでは提示されている。こうしてこの作品は、真実を「語る行為」とは「聴く行為」であり、物語とは、「語る行為」と「聴く行為」が同時に行われることによって初めて、真実を表現できることを示している。

第三節では、なぜこの作品において「語る行為」と「聴く行為」が強調されるのか、その理由について、同性愛の語られ方を通して考察する。

前期の小説においては、同性愛はけっして人々の苦悩の救いにならず、あるいはまた、他者に対する理解の可能性を同性愛に見出すことはできない。一方この作品では、同性愛の苦悩と喜びは言葉で語ることでできない隠された真実の姿として描かれ、この隠された真実を明らかにすることを通して、他者に対する理解の可能性が表現されている。ここで「語る行為」と「聴く行為」が強調されるのは、語り手と聴き手の相互作用で成立する物語によって隠された真実が表現され、他者とのかわりや相互理解の可能性がそこに求められることを、この作品が表現するからである。またこのような物語とはまさに、黒人の伝統的文化様式である“call and response”を受け継いだものであるともいえる。

以上述べてきたように、第三章では、この作品には、言葉で語ることでできない黒人の複雑な生は、「語る行為」と「聴く行為」が同時に行われる物語によって表現されうるのではないかという、物語の新たな可能性が提示されていることを明らかにした。

#### 第四章 言葉で語ること

第四章では、第一章から第三章までに取り上げたボールドウィンの三つの後期小説が提示する「言葉で語ること」に対する認識について考察する。

第一節では、三つの後期小説に共通する語りの重層性を通して見出すことのできる表現者としての作家が、「言葉で語ること」に対してどのような認識を示しているかについて明らかにする。ボールドウィンの後期小説は、第一に、アメリカ黒人の複雑な生は言葉で容易に語ることはできないと



の後期小説は、時間と空間を隔てた他者の経験に対する共感のあり方、たとえば、アメリカ黒人男性であり、同性愛者でもある人物の物語を、日本人の一人の女性が読むことの意味を示唆している。他者の物語を共感を持って読むこととは、けっして他者に同一化することを意味するのではなく、他者の苦痛に対する自らの共感のあり方を常に問い続ける行為であることを、後期小説は示している。

今後の課題としては、前期小説を語りという視点からさらに詳細に読み解くことが求められる。前期後期合わせてすべての作品の読み直しが行われて初めて、ボールドウィン文学の新たな全体像が提示され、黒人文学におけるその新たな位置づけがなされることになるだろう。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、アメリカ黒人文学の代表的作家の一人であるジェイムズ・ボールドウィンの、従来ほとんど評価されることのなかった後期作品を、「語り」という新しい視点から再検討せんとしたものである。ボールドウィンは生涯で6編の長編小説を書いたが、前期3作と後期3作では文学的評価はまったく異なり、前期作品に与えられる高い評価に比べ、後期作品は作者の力量の衰退を示していると一般に評されてきた。しかし、本論文は作者が1960年代にかかわった公民権運動、およびそれを取り巻くアメリカ社会に対する作者の体験から生まれた作家意識、及び歴史意識が後期の3長編小説には反映されていると捉え、あえてこの通説の再検討に挑戦したものである。

その際、本論文は後期小説に共通する作者本人と極めてよく似た人物の一人称による「語り」に着目し、これをそのまま作者の政治メッセージと読むのではなく、すなわち、物語が「何を」語っているかではなく、「いかに」語っているかという「語り方」を通して作品を読み解くという新しい批評の視角を提唱している。

第一章では、*Tell Me How Long the Train's Been Gone* という作品を取り上げ、従来文学的欠陥とみなされてきた卑語の多用、長いパラグラフ、断片的なエピソードの羅列という特徴は、たとえ成功しても「アメリカ人であることと黒人であること」の二重性が克服されないという、言葉で語りえない過酷なアメリカ黒人特有の「恐れ」を、間接的に表現するための装置であると論ずる。第二章では *If Beale Street Could Talk* を取り上げ、黒人女性主人公による素朴で未熟な一人称の語り、そしてその女性主人公の「凝視」こそが、アメリカ社会における権威の虚偽性と、アメリカ黒人及び黒人以外の社会的弱者に対する共感を表現可能なものになっていると論ずる。第三章では、*Just Above My Head* を取り上げ、一人称の語り手の声が、局外の語り手に転換することを重視し、言葉で語ることのできないアメリカ黒人の複雑な生は、「語る行為」と「聴く行為」が

同時に行われる物語によって表現されうるという、物語の新たな可能性が提示されていると論ずる。第四章は後期3作品の提示する「言葉で語ること」に対する認識が「証言者」としての作者ボードウィンの作家意識、歴史意識を示していると論ずる。

本論文は長大であるため、論述において若干の重複部分が見られるなど煩雑さを感じる点もあったが、筆者は作者の全作品はもちろんのこと、国内外のボードウィン批評を可能な限り渉猟かつ検討したうえで、従来のボードウィン論を根底から覆した。したがって本論文はボードウィン批評の新たな地平を切り開いた研究といえる。

このように、本論文は自立して研究活動を行うのに必要な高度の研究能力と学識を有することを明確に示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。

いう、黒人の生を言葉で表現する困難さを示している。また第二に、後期小説は、語り手と聴き手の相互作用によって成立する物語に、黒人の生を表現する可能性を見出している。この第二の点は、物語に対する読者の積極的な読みの行為の強調と言いかえることもできる。このような「言葉で語ること」の限界と可能性に対する認識は、表現しようとするものは言葉の持つ力によって伝えることができるという、前期小説に見られる言葉に対する確信とは全く異なるものである。後期の小説には、黒人の複雑な生を言葉では語りえないものと見なしたうえで、それでもなお、テキストと読者の相互作用から生まれる物語が黒人の生の新たな姿を創出できるのではないかと模索する作家の、「言葉で語ること」に対する強烈な問題意識が見出せる。

第二節では、後期のボールドウィンの作家意識をインタビューやエッセイから考察し、「言葉で語ること」に対する彼自身の認識を考察する。公民権運動の体験の中で、ボールドウィンに大きな影響を与えた出来事には、南部での体験、黒人急進派のボールドウィン批判、M. L. King 牧師を始めとする黒人運動指導者の相次ぐ暗殺があげられる。これら一連の出来事は、ボールドウィンに「言葉で語ること」の見直しを迫り、その結果ボールドウィンは、自らの作家の役割を「証言者」と考えるようになった。この「証言者」の役割とは、アメリカ社会の中で、社会の見える見えない掟に左右されながら生きる黒人一人一人の複雑な生を理解し、表現することである。「社会」そのものに対する関心が強かった前期に比べ、後期のボールドウィンが「社会」よりも「人々」に対してその関心をより強めたことが理解される。また彼は、「歴史とは何か、歴史はわれわれをどのように理解しているのか」という問題意識に基づき、歴史の見直しの試みとして後期小説を執筆したことを、インタビューで明らかにしている。このように、ボールドウィンが後期の小説を執筆した意図とは、アメリカ社会の中で生きてきた黒人の歴史の「証言者」となることである。後期小説が提示する「言葉で語ること」に対する問題意識とは、まさに作者ボールドウィンの公民権運動における体験を通して生まれた作家意識であり、歴史意識であるといえる。

第三節では、ボールドウィンの作家意識と歴史意識を表す「証言者」の役割を、戯曲 *Blues for Mister Charlie* (1964) を通して、さらに具体的に考察する。

南部で実際に起きた黒人殺人事件を題材にしたこの裁判劇には、ボールドウィン自身の公民権運動での体験と、当時のアメリカ社会の様相が直接反映されており、登場する多くの証人の証言を考察することによって、「証言者」の役割とは何か、証言とは具体的にどのような行為であるのかを理解することができる。ここで明らかになる「証言者」の役割とは、黒人の現実を目撃し、記憶し、それを回想する中で、その目撃した現実を自らの体験に重ねながら共有し、その現実を一つの像として語りの背後に浮かび上がらせることである。この作品には、「言葉で語ること」のできない黒人の生や黒人の歴史を表現するには、その「言葉で語ること」のできないものを自らの体験に重ねながら理解しようとする「証言者」の積極的なかわりの重要性が示されている。

第四章では、後期小説が提示する「言葉で語ること」に対する認識を、作者ボールドウィンの作家意識と歴史意識を表す「証言者」の役割を通して明らかにした。

### 結び ボールドウィンの後期小説における作家像

結びでは、後期小説における表現者としての作家が提示する、「言葉で語ること」に対する認識の意義について考察し、今後の研究の展望を述べる。

黒人の歴史という点から見ると、ボールドウィンの後期小説が提示する「言葉で語ること」に対する認識には三つの重要な意義がある。その一つは、アメリカ史において不在とされてきた黒人の生の現実を、「言葉で語ること」とのかかわりにおいて明らかにした点である。後期の小説の登場人物は皆名もなき黒人であり、彼らの生はけっしてアメリカの公の歴史には登場しない。すなわち、彼らの生きた現実とは歴史上不在とされ、いわば否認された歴史だといえる。後期小説は、アメリカ史において黒人の生がいかに不在化されてきたかという歴史的事実を、「言葉で語ること」という、文学と深くかかわる問題を通して表現している。第二の意義は、不在化された黒人の現実もまた一つではないことを指摘した点にある。後期小説には、公民権運動がもたらした黒人社会の経済状況の好転が如実に現れている。このような経済状況を始めとする黒人社会の変化は、不在とされた黒人の歴史を顕在化し、アメリカ史における一つの位置をそれにもたらしたといえる。しかしながら、この一見好ましい変化は、現代の黒人が今なお黒人特有の状況に苦悩していることを不可視化させる結果にもなっている。ボールドウィンの後期小説は、一見進歩したかに見える時代に再び過去の苦悩を呼び起こし、過去を通して現在の進歩を検証する重要性を指摘している。第三の意義は、不在化された黒人の生はいかにして表現されうるのかという、その表現方法の一つの試みを示している点にある。後期小説はどれも、物語テクストの語りと読みによって抑圧された生が一つの像として結ばれることを明らかにし、物語が抑圧された人々の歴史を叙述する一つの試みとなることを提示している。

以上述べてきたように、本論文では、ボールドウィンの後期小説における表現者としての作家像を、その語りを通して読み解き、その作家像の示すものが、黒人の歴史の「証言者」という、作者ボールドウィンの公民権運動の体験を通して生まれた作家意識と歴史意識の現れであることを明らかにした。ボールドウィンの後期小説は、歴史上不在とされた黒人の生を、語り手と読み手の相互作用によって成立する物語によって表現する可能性を示している。すなわちボールドウィンの後期小説は、アメリカの黒人の歴史は言語による芸術である文学によっていかにして表現されうるのかという、歴史叙述における文学の果たす一つの役割を提示しているのである。このように、ボールドウィンの後期小説を読み直すことは、歴史叙述における物語行為の新たな可能性を提起するものとしてボールドウィン文学をとらえることを意味する。また、物語における読む行為を強調する彼

の後期小説は、時間と空間を隔てた他者の経験に対する共感のあり方、たとえば、アメリカ黒人男性であり、同性愛者でもある人物の物語を、日本人の一人の女性が読むことの意味を示唆している。他者の物語を共感を持って読むこととは、けっして他者に同一化することを意味するのではなく、他者の苦痛に対する自らの共感のあり方を常に問い続ける行為であることを、後期小説は示している。

今後の課題としては、前期小説を語りという視点からさらに詳細に読み解くことが求められる。前期後期合わせてすべての作品の読み直しが行われて初めて、ボールドウィン文学の新たな全体像が提示され、黒人文学におけるその新たな位置づけがなされることになるだろう。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、アメリカ黒人文学の代表的作家の一人であるジェイムズ・ボールドウィンの、従来ほとんど評価されることのなかった後期作品を、「語り」という新しい視点から再検討せんとしたものである。ボールドウィンは生涯で6編の長編小説を書いたが、前期3作と後期3作では文学的評価はまったく異なり、前期作品に与えられる高い評価に比べ、後期作品は作者の力量の衰退を示していると一般に評されてきた。しかし、本論文は作者が1960年代にかかわった公民権運動、およびそれを取り巻くアメリカ社会に対する作者の体験から生まれた作家意識、及び歴史意識が後期の3長編小説には反映されていると捉え、あえてこの通説の再検討に挑戦したものである。

その際、本論文は後期小説に共通する作者本人と極めてよく似た人物の一人称による「語り」に着目し、これをそのまま作者の政治メッセージと読むのではなく、すなわち、物語が「何を」語っているかではなく、「いかに」語っているかという「語り方」を通して作品を読み解くという新しい批評の視角を提唱している。

第一章では、*Tell Me How Long the Train's Been Gone* という作品を取り上げ、従来文学的欠陥とみなされてきた卑語の多用、長いパラグラフ、断片的なエピソードの羅列という特徴は、たとえ成功しても「アメリカ人であることと黒人であること」の二重性が克服されないという、言葉で語りえない過酷なアメリカ黒人特有の「恐れ」を、間接的に表現するための装置であると論ずる。第二章では *If Beale Street Could Talk* を取り上げ、黒人女性主人公による素朴で未熟な一人称の語り、そしてその女性主人公の「凝視」こそが、アメリカ社会における権威の虚偽性と、アメリカ黒人及び黒人以外の社会的弱者に対する共感を表現可能なものになっていると論ずる。第三章では、*Just Above My Head* を取り上げ、一人称の語り手の声が、局外の語り手に転換することを重視し、言葉で語ることでできないアメリカ黒人の複雑な生は、「語る行為」と「聴く行為」が

同時に行われる物語によって表現されうるといふ、物語の新たな可能性が提示されていると論ずる。第四章は後期3作品の提示する「言葉で語ること」に対する認識が「証言者」としての作者ボードウィンの作家意識、歴史意識を示していると論ずる。

本論文は長大であるため、論述において若干の重複部分が見られるなど煩雑さを感じる点もあったが、筆者は作者の全作品はもちろんのこと、国内外のボードウィン批評を可能な限り渉猟かつ検討したうえで、従来のボードウィン論を根底から覆した。したがって本論文はボードウィン批評の新たな地平を切り開いた研究といえる。

このように、本論文は自立して研究活動を行うのに必要な高度の研究能力と学識を有することを明確に示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。